

第4章 動物

はじめに

本章では当別町の自然環境を五つのカテゴリーに大別し（表1）、文献等で記録された野生生物種のうち、哺乳類・両生類・爬虫類・鳥類・魚類および底生動物について種名をリストアップし、一覧に示した。ただし昆虫については補足的に代表的な科までについてのみ整理した。解説では、特に哺乳類のうち代表種、鳥類のうち猛禽類、魚類のうち特徴的な種についての紹介を行った。

表1 本稿で採用した環境区分

環境分類		要素	該当地域
1	市街地	人間の生活圏とその近隣 (農耕地は畑作地を想定)	本町地区とその周辺
	農耕地		太美地区市街地とその周辺
2	防風林	平地の連続した林地環境	太美地区防風林
	河畔林		当別川河畔林
3	河川敷・牧草地	湿性地をのぞく 草地の開放環境	当別川流域
	休耕田		丘陵地～山地の牧野・休耕地・荒地等
4	河川域	水域および湿性草地環境 (水田を含む)	石狩川・当別川合流点付近
	池沼・ダム湖 湿地・水田		青山・当別ダムほか農業用ため池 主に町域南部の水田地帯
5	丘陵・山地	丘陵地～山地のまとまった 森林環境（自然林・人工林）	神居尻山～伊達山（北海道医療大学の森）
	(森林帯)		別狩岳～阿蘇岩山～スウェーデンヒルズ

第1節 哺乳類・両生類・爬虫類

当別町に生息する両生類6種および爬虫類6種について表3（P58）に、哺乳類33種を表4（P59）に示した。以下、生息環境ごとに代表種について概説する。

市街地・農耕地

本町地区および太美地区を中心とした市街地（公園林を含む）とその

周辺の農耕地には、コウモリ各種、ハツカネズミ、ドブネズミなどのネズミ、エゾリス、エゾシマリス、キタキツネ、エゾタヌキ、アライグマ、ニホンイタチなどの中型食肉目が生育する。

両生類ではアズマヒキガエル、ニホンアマガエル、爬虫類ではヒガシニホントカゲ、ニホンカナヘビ、アオダイショウが生息する。

コウモリ類は主に夜行性であり、昼間は古い家屋や寺社、校舎、橋梁などの建造物、樹洞、トンネルや坑道などに潜んでいるため人目にふれる機会がほとんどない。よって市街地での存在は一般的にあまり知られていないが、街灯の周囲で昆虫類を捕食する姿などが観察されることもある。市街地周辺ではキタクビワコウモリ（樹洞・家屋性）、ヒナコウモリ（洞穴・家屋性）、カグヤコウモリ（樹洞・家屋性）、モモジロコウモリ（洞穴性）などが生息している。

農耕地に生息する主なネズミ類はエゾヤチネズミ、カラフトアカネズミ、ハツカネズミ、ドブネズミの4種である。一般に前2種は「野ネズミ」、後2種は「家ネズミ」と呼ばれる。エゾヤチネズミ（写真1）は農耕地のみならず、河川敷などの草地環境や、丘陵から山地の森林環境に至るまで広く生息しているが、カラフトアカネズミは農耕地を主な生息環境としている。ドブネズミは水田、排水溝、休耕田に多く生息する。ハツカネズミは畑地に集まる傾向がある。

エゾリス（写真2）はユーラシア大陸北部に広く分布するキタリスの亜種^{*1}で、国内では北海道のみに分布。本州以南に生息するニホンリス *Sciurus lis* とは別種とされている。平野部から亜高山帯にかけての森林に生息し、市街地の公園でも樹木の多い環境であれば姿を見せる。昼行性で、冬眠せず真冬でも活動する。樹洞を巣として利用するか、自ら鳥

*1 同じ種だが分布する地域間で色や大きさの異なる集団



写真1 エゾヤチネズミ(撮影地/当別町川下)



写真2 エゾリス(太美防風林)

のように枝を組み合わせて巣を作る。なお同じリス科のエゾシマリスも、平地の公園林や防風林、河畔林にも生息するが、本稿では山地の樹林環境にて紹介する。

キタキツネ（写真3）およびエゾタヌキ（写真4）も活動範囲が広く、さまざまな環境下に出現する。都市部に姿を見せる個体も近年では珍しいものではなくっている。アライグマやニホンイタチなどは市街地の川沿いに生息し、両生類や爬虫類、魚類などを捕食している。

本町地区では、街中を縦断して当別川に合流するパンケチュウベシナイ川とその流域の林地（白樺緑地など）、大成寺および当別神社の社寺林の存在、また当別川の河畔林に隣接することなどが、この地域の生物相の多様化に寄与している。

太美地区の市街地は、獅子内から当別太まで南北に長く連続する防風林、基線沿いに東西に延びる防風林に隣接することと、また西当別神社の社寺林の存在などが、これら動物の基本的な生息地となっている。



写真3 キタキツネ（スウェーデンヒルズ）



写真4 エゾタヌキ（石狩川河畔林）

防風林・河畔林

西当別地区には周辺を畑地・水田・牧草地などに囲まれた広葉樹の防風林（次頁写真5）が、南北東西に格子状に延びている。この防風林の延長距離は約20km、幅は約50～70m、平均樹高は概ね10～20mで、構成樹種はヤチダモ、セイヨウハコヤナギ、ハンノキなどが主となっている。林床にはササが優占し、低木～亜高木層が少ないために林内は開けており、見通しがよい。道路と線路によって一部が寸断されているもの



写真5 水田に隣接する西当別地区の防風林

の、全体的に見ればほぼ連続した林地環境となっている。また当別川の流域には河畔林が連続している。まとまった樹林帯が少なくなった平野部において、こうしたベルト状の林地環境は野生動物の生息や移動経路としても重要で、各種の小型獣類、鳥類、昆虫類などに利用されている。

哺乳類ではトガリネズミ、コウモリ、ネズミ、リス、エゾユキウサギ、キタキツネ、エゾタヌキ、イタチ類などが生息する。両生類では前項の各種に加えてエゾアカガエルが見られるほか、河畔林内の水たまりがエゾサンショウウオの産卵地となっていてところもある。また爬虫類では数は少ないがジムグリ、シマヘビ、ニホンマムシが見られることがある。

防風林に生息するコウモリはいずれも樹洞性であり、自然に形成された樹洞やキツツキの古巣などを利用している。

トガリネズミ科（食虫目）は長く尖った鼻先が特徴の小型哺乳類である。食虫目は「ネズミ」と呼ばれているが分類的にはモグラの仲間である。防風林・河畔林から草地、湿性林、山地の森林に至る幅広い環境に生息し、落葉層や腐植上層において昆虫やミミズなどを捕食している^{*2}。

ネズミ科のエゾヤチネズミは落葉層の豊かな防風林や河畔林と、農耕地や草地環境との間を行き来している。カラフトアカネズミ、ドブネズミ、ハツカネズミの3種は主に農耕地に生息するが、秋にはこうした平

*2 なお当別町では未記録だが、2014（平成26）年に旭川市忠別川の河畔林において、トガリネズミと同科のニホンジネズミ *Crocidura dsinezumi* の捕獲例がある。同種は札幌市でも捕獲されているが、道南での記録が主となっている。生息環境は水田や耕地に囲まれた河畔林、平地から低山の草地や林地とされるため、同じような環境が広がる当別町にも生息の可能性がある

地林内に移動することが知られている。エゾアカネズミとヒメネズミは森林性で、農耕地や草地には移動・分散期に経路として利用するのみである。ミカドネズミは落葉層の厚い灌木林を主な生息環境としている。個体数は少ない。

リス科ではエゾリス、シマリス、エゾモモンガの3種が生息する。太美防風林のエゾモモンガは数年ほど前から、その生息が野生動物の撮影を趣味とする人たちの間で広く知られるようになり、防風林内にある何カ所かの観察ポイントには毎春大勢のカメラマンたちが訪れるようになった。



写真6 エゾモモンガ（太美防風林）

エゾモモンガ（写真6）はユーラシア大陸北部に広く分布するタイリクモモンガの亜種で、国内では北海道にのみ生息する。本州に生息するニホンモモンガ *Pteromys momonga* とは近縁ではあるが別種で、同種は日本固有種である。エゾモモンガは北海道全域の平野部から亜高山帯にかけて分布する。

巣は、自然にできた樹洞のほか、キツキ類があげた古巣をよく利用している。

繁殖用の巣穴と避難用の穴、越冬用の穴などを分けて利用している。主食は植物で、木の冬芽や葉、花穂、樹皮の甘皮、小枝の樹皮、木の実や種子などを食べている。

イタチ科ではニホンイタチ、キタイイズナ、ニホンテンが生息する。イズナは世界最小のイタチで、国内では北海道産亜種がキタイイズナとされ、かつてはコエゾイタチと呼ばれてきた。夏毛は背側が茶色で腹側が白色、冬毛では全身純白になる。海岸部・平野部から高山帯に至るまでの幅広い環境に分布する。主な捕食対象はネズミで、地下のトンネルや雪中をもぐって捕食する。

なお定着はしていないものの、ヒグマやエゾシカといった大型獣が防風林や河畔林に出現することがまれにある。このことは、河畔林や防風林が幅の狭い小面積の樹林地でありながら、带状に延長していることで、周辺の丘陵林・山地林に接し、平地部とをつなぐ「緑の回廊」的機能を果たしていることを示している。例えば西当別地区の防風林はス

ウェーデンヒルズのある丘陵麓に位置する獅子内神社から当別川左岸北部にあたる南5号までを結び、また当別川河畔林も中流域において東西の山林と完全に接している。

河川敷・牧草地・休耕田

当別川河川敷や流域の牧草地、休耕田や耕作放棄地などの草地環境にはトガリネズミ科、ネズミ科、エゾユキウサギなどの動物が生息する。両生類・爬虫類では市街地・農耕地、防風林・河畔林の生息種とほぼ同様である。エゾヤチネズミはこうした環境において最も多く生息するが、河畔林や孤立林によって落葉層の豊かな場所も好適な生息場所としている。

エゾユキウサギ（写真7）は平野部から亜高山帯まで広範囲に生息する。以前はエゾノウサギと呼ばれていたが、本州以南のノウサギと区別するためユキウサギと呼ばれるようになった経緯がある。本州以南に生息するニホンノウサギ *Lepus brachyurus* は別種であり、本種はユーラシア大陸北部に分布するユキウサギの亜種である。中型食肉獣や中大型猛禽類の捕食対象となるため、警戒心が強く、日中は草陰などに潜んでいることが多い。夏毛はほぼ褐色から灰褐色であるが、冬には白色となる。



写真7 エゾユキウサギ（高岡）

河川域・池沼・ダム湖・湿地・水田

水田などの湿地環境においては、トガリネズミの仲間では、ヒメトガリネズミが優占する。コウモリではドーベントンコウモリが池沼や流れの緩やかな河川などで水生昆虫類を捕食している。ネズミでは特にドブネズミが水域沿いによく現れる。またキタキツネ、エゾタヌキ、アライグマも両生類、爬虫類、魚類、甲殻類、昆虫類などの捕食環境として利用している。

両生類では通常の在来種に加え、国内外来種のツチガエル、トノサマガエルが見られる。爬虫類ではヒガシニホントカゲ、ニホンカナヘビが

昆虫類を、アオダイショウ、シマヘビ、ジムグリなどヘビ類がカエル類やネズミ類などを捕食する環境として利用している。

アライグマは1979（昭和54）年に恵庭市で飼育個体の約10頭が逃亡し、付近の酪農地帯に定着して以降、ほぼ全道的に分布域を拡大させてきた外来種である。各種動植物を幅広く捕食する雑食性の上に繁殖力が強いいため、在来生態系に影響を与える存在、また農作物に被害を与える害獣として、2005（平成17）年には「特定外来生物」に指定されている。

当別町においても本種による農作物被害件数は年を追うごとに増大しており、被害地域も拡大している。

河川や池沼などの水域にはイタチの出現頻度も高い。当別町には5種が生息し、在来種はキタイイズナ、エゾクロテンの2種で、ニホンイタチ（ホンドイタチ）、ニホンテン（ホンドテン）、アメリカミンクの3種は外来種である。北海道においても既に絶滅したカワウソ *Lutra lutra whiteleyi* もかつては当別川流域に生息していた。1972（昭和47）年発行の『当別町史』には「20～30年前までは見られたが、今はほとんど見あたらない」との記述が見られる。また1981（昭和56）年発行の『当別高岡一世紀のあしあと』には「（聚富川には）冬期間はウグイが遡上し、これを追ってカワウソが棲んでいて鉄砲で捕獲した」とある。



写真8 ニホンイタチ（石狩川）

ニホンイタチ（写真8）は日本固有種であるが、北海道には本来分布しておらず、明治初期に函館港へ侵入したものが最初とされ、以後、毛皮利用を目的とした保護増殖政策に伴い全道へ分布した国内外来種である。1914（大正3）年には石狩市花畔での記録がある。ただし、昭和初期までの道内文献に現れる「エゾイタチ」とは、近縁種のエゾオコジョ *Mustela erminea orientalis* を指すため注

意が必要である。

かつてニホンイタチは在来の近縁種であるエゾオコジョの分布域を狭めたが、その後国外外来種ミンクと競合し、北海道中部から東部ではミンクの勢力に圧されている。しかしミンクが比較的流れの緩やかな河川を餌場とすることに対し、ニホンイタチは本流から離れた流速の速い支

流や山間部の急峻な溪流、また流域の樹林など、環境を多面的に利用することから棲み分けがはかられている。

アメリカミンクは北アメリカ原産のイタチで、北海道には1928（昭和3）年に毛皮生産目的に移入された国外外来種である。1960年代以降に飼育場から逃げ出した個体が野生化し、以後全道に広く分布するようになった。

丘陵・山地（森林帯）

森に囲まれたスウェーデンヒルズ、高岡地区は標高約50～80mの丘陵地にあり、住民が野生動物に接する機会の多い地域である。冬季にはキタキツネ、エゾユキウサギの新しい足跡がほぼ毎日見られ、餌台を置く家にはエゾリスが連日現れる。白化個体の見られた時期もあったという。窓の外にエゾモモンガがいたとの話もあり、周辺林地で繁殖しているものと思われる。雪解け時期になると庭のバラ、リンゴ、ブルーベリーなどがネズミの被害を受けるといふ。林内のネズミは森林性のエゾアカネズミとヒメネズミが主となる。

近年ではアライグマが増えており、沢筋では足跡がふつうに見られるほか、冬には庭先に姿を見せることもある。また薄暮時にはヤマコウモリらしき鳴声も聴かれるという。本種は樹洞に生息する森林性のコウモリで、食虫性コウモリとしては日本最大である。エゾシカも生息はしているものの、まだ大きな群れは目撃されていないようである。

エゾシマリス（写真9）は平野部の公園林・防風林、河畔林から、樺戸山地の神居尻山、ピンネシリなど標高1000m級の稜線部に至るまで、幅広い環境に適応している小型リス類である（種名は背と顔に縞があることから）。頬の内側に頬袋を持ち、木の実などを保留することができる。昼行性で、樹上でも地上でも活動し、巣は樹洞や地下に作る。エゾリスとは異なり本種は冬眠を行い、1年の約半分以上を地下の巣穴で過ごしている。その際に木の実を地中に貯蔵する生態は、樹木の実生の散布・定着につながっている。



写真9 エゾシマリス（高岡）



写真10 エゾクロテン (スウェーデンヒルズ)

エゾクロテン（写真10）は北海道在来のテンで、ユーラシア大陸北部からシベリアまでの広い地域に分布する。日本では北海道にのみ生息する。毛色は淡黄色から暗褐色まで、個体により濃淡があり、手足は黒色。冬毛は夏毛よりも淡色となるが、本道の亜種はユーラシア大陸のクロテンよりもさらに淡色となる。冬眠はせず、一年中昼夜を問わず活動する。毛皮目的の乱獲が本種の個体数を激

減させたことから、1920（大正9）年には狩猟が禁止されている。

1940年代になると毛皮生産目的にニホンテン（ホンドテン）が本州より北海道へ移入され、野生化したものが道南から石狩地方に分布している。現在、道央圏では在来種のエゾクロテンと国内外来種のニホンテンとが混生している状況となっている。

ヒグマは日本に生息する陸生哺乳類中最大の種である。町域の東西に延びる山域の森林帯を中心に生息するが、住宅地でも足跡が確認されるなど、行動圏は広い。冬季は巣穴で冬眠し、その間に出産する。個体数の実態は不明だが、近年では道央圏でも増加している。当別町におけるヒグマによる人身事故は1970（昭和45）年から2000（平成12）年までの30年間で1件のみである（1973年狩猟者が襲撃され負傷）。



写真11 ヒグマのはく製

表2 ヒグマの出現事例

年	場所
2018	航空自衛隊当別分屯基地、青山奥
2019	青山一番川沿線、青山奥橋付近
	青山二番川地区
	青山奥四番川地区
	弁華別墓地内
2020	獅子内
	青山二番川地区
2021	スウェーデンヒルズの歩道
	ビトエ地区
	高岡地区西当別変電所付近
2022	道の駅とうべつ付近
	スウェーデンヒルズゴルフ倶楽部内
	金沢神社付近
	材木沢小学校跡地付近
	スウェーデンヒルズゴルフ倶楽部内

資料：当別町

ヒグマと並ぶ大型陸生哺乳類であるエゾシカ（写真12）は、かつて積雪の少ない道東・道北の一部に限定的に生息していたが、1990年代以降には石狩・空知・留萌地方などへも分布が拡大し、近年では個体数が爆発的に増加している。それに伴い農林業被害や交通事故が多発し、また森林や高山帯植生などの生態系破壊が深刻化している。『当別町鳥獣被害防止計画（2018年度改訂）』によれば、エゾシカによる農作物被害総額は約1500万円にのぼる。食害対象は水稻、小麦、小豆、大豆、そば、牧草、子実とうもろこし、スイートコーン、馬鈴しょ、南瓜、キャベツで、中でも水稻と南瓜の被害額が大きい。

生態的には、同地域に定着している個体と季節移動を行う個体とがあり、後者は時に100km以上も移動する。



写真12 エゾシカ（スウェーデンヒルズ周辺）

表3 当別町に生息する両生類・爬虫類

	目名	科名	和名 学名	市街地 農耕地	防風林 河畔林	河川敷 牧草地 休耕田	河川域 池沼ダム湖 湿地・水田	丘陵・山地 (森林帯)	備考
両生類	1 有尾目	サンショウウオ科	エゾサンショウウオ <i>Hynobius retardatus</i>		●		●	●	
	2	ヒキガエル科	アズマヒキガエル <i>Bufo japonicus formosus</i>	●	●	●	●	●	国内外来種
	3	アマガエル科	ニホンアマガエル <i>Hyla japonica</i>	●	●	●	●	●	
	4 無尾目	アカガエル科	エゾアカガエル <i>Rana pirica</i>		●		●	●	
	5		ツチガエル <i>Glandirana rugosa</i>				●	●	国内外来種
	6		トノサマガエル <i>Pelophylax nigromaculatus</i>				●		国内外来種
爬虫類	1	トカゲ科	ヒガシニホントカゲ <i>Plestiodon finitimus</i>	●	●	●	●	●	
	2	カナヘビ科	ニホンカナヘビ <i>Takydromus tachydromoides</i>	●	●	●	●	●	
	3	有隣目	ジムグリ <i>Euprepiophis conspicillatus</i>		●	●	●	●	
	4		アオダイショウ <i>Elaphe climacophora</i>	●	●	●	●	●	
	5		シマヘビ <i>Elaphe quadrivirgata</i>		●	●	●	●	
	6		ニホンマムシ <i>Gloydus blomhoffii</i>		●	●	●	●	

表4 当別町に生息する哺乳類

	目名	科名	和名 学名	市街地 農耕地	防風林 河畔林	河川敷 牧草地 休耕田	河川域 池沼ダム湖 湿地・水田	丘陵・山地 (森林帯)	備考		
1	モグラ目 (食虫目)	トガリネズミ科	エゾトガリネズミ(バイカルトガリネズミ) <i>Sorex caecutiens saevus</i>		●			●			
2			オオアシトガリネズミ <i>Sorex unguiculatus</i>			●		●			
3			ヒメトガリネズミ <i>Sorex gracillimus</i>		●	●		●			
4	コウモリ目 (翼手目)	ヒナコウモリ科	キタクビワコウモリ(ヒメホリカワコウモリ) <i>Eptesicus nilssonii parvus</i>	●	●			●	太美防風林で捕獲		
5			ヤマコウモリ <i>Nyctalus aviator</i>		●			●	太美防風林で捕獲		
6			ヒナコウモリ <i>Vespertilio sinensis</i>	●	●			●	太美防風林で捕獲		
7			カグヤコウモリ <i>Myotis frater kaguyae</i>	●	●			●	太美防風林で捕獲		
8			モモジロコウモリ <i>Myotis macrodactylus</i>	●	●			●	当別川流域		
9			ドーベントンコウモリ <i>Myotis petax ussuriensis</i>		●		●	●	太美防風林で捕獲		
10			コテングコウモリ <i>Murina ussuriensis</i>		●			●	太美防風林で捕獲		
11			ネズミ目 (齧歯目)	ネズミ科	エゾヤチネズミ <i>Myodes rufocanus bedfordiae</i>	●	●	●	●		
12					ミカドネズミ <i>Myodes rutilus mikado</i>		●	●		●	ヒメヤチネズミ亜種
13					カラフトアカネズミ <i>Apodemus peninsulae giliacus</i>	●	●			●	
14	エゾアカネズミ <i>Apodemus speciosus ainu</i>				●	●		●			
15	ヒメネズミ <i>Apodemus argenteus</i>				●			●			
16	ハツカネズミ <i>Mus musculus</i>	●			●	●		●			
17	ドブネズミ <i>Rattus norvegicus</i>	●			●	●	●	●			
18	リス科	エゾリス <i>Sciurus vulgaris orientis</i>			●	●			●	白化個体が見られた時期がある	
19		エゾシマリス <i>Tamias sibiricus lineatus</i>			●	●			●	神居尻山、ピンネシリなどにも生息	
20		エゾモモンガ <i>Pteromys volans orii</i>				●			●	太美防風林、ゴルフ場内林でも繁殖	
21	ウサギ目 (兎目)	ウサギ科		エゾユキウサギ <i>Lepus timidus ainu</i>		●	●		●		
22	ネコ目 (食肉目)	イヌ科		キタキツネ <i>Vulpes vulpes schrencki</i>	●	●	●	●	●	スウェーデンヒルズゴルフ場内でも繁殖	
23				エゾタヌキ <i>Nyctereutes procyonoides albus</i>	●	●		●	●		
24				ノイヌ <i>Canis familiaris</i>			●		●		
25		クマ科		エゾヒグマ <i>Ursus arctos yesoensis</i>					●	2021年スウェーデンヒルズ内で足跡確認	
26		アライグマ科		アライグマ <i>Procyon lotor</i>	●	●	●	●	●	目撃頻度が高まっている／国外外来種	
27		イタチ科		ニホンイタチ <i>Mustela itatsi</i>	●	●	●	●	●	国内外来種	
28			キタイイイズナ <i>Mustela nivalis nivalis</i>	●	●	●	●	●			
29			ニホンテン <i>Martes melampus</i>		●	●	●	●	国内外来種		
30			エゾクロテン <i>Martes zibellina brachyura</i>				●	●	スウェーデンヒルズ丘陵林にも生息		
31			アメリカミンク <i>Mustela vison</i>				●		国外外来種		
32			ネコ科	ノネコ <i>Felis catus</i>		●	●				
33			ウシ目 (偶蹄目)	シカ科	エゾシカ <i>Cervus nippon yesoensis</i>			●		●	スウェーデンヒルズ丘陵林にも生息

第2節 鳥類

当別町とその近隣地域で記録された鳥類約250種を表5（P68）に示した。以下に環境ごとの代表種のうち、特に猛禽類を中心に紹介する。

市街地・農耕地

本町地区、太美地区の公園緑地などで見られる鳥はスズメ、カラス、ハト、シジュウカラ、アカゲラ、ヒヨドリ（写真13）、ムクドリ、ハクセキレイ（写真14）、マガモなど。冬季にはキレンジャク、ツグミなどが渡来する。近年分布を拡げつつあるカササギの姿も市街地近隣で確認されている。

農耕地ではノスリ、トビ、キジバト、ヒバリ、ホオジロ、モズなどのほか、コハクチョウやマガンが春の渡去時に立ち寄って採食する。また同時期にミヤマガラスの群れがほぼ毎年見られる。猛禽類のノスリは農道の電柱に止まって餌を探している姿がよく見られる。冬季はコチョウゲンボウなどが探餌に出現する。

身近なハヤブサであるチゴハヤブサ（写真15）は農耕地とその周辺に生息し、市街地の緑地でも繁殖している。北海道と東北地方北部に夏鳥として渡来し、開けた空間で小型鳥類やトンボなどの昆虫類、哺乳類ではコウモリなどを空中で巧みに捕食する。主にカラマツ、シラカバなどの樹上につくられたカラスなどの古巣を利用して繁殖するが、当別町では1995（平成7）年と1998（平成10）年に町道19線南1号にあった電波塔に営巣して繁殖した例がある。秋になると越冬地へ移動する。



写真13 ヒヨドリ（スウェーデンヒルズ） 写真14 ハクセキレイ（スウェーデンヒルズ） 写真15 チゴハヤブサ（19線南1号電波塔）

トビは石狩地方に生息する猛禽類では最も目撃頻度が高い。環境適応力が強く、防風林、河畔林、送電線鉄塔などさまざまな場所に営巣している。防風林内には長年の継続使用で巨大化している巣もある。巣材にゴミ捨て場から拾ってきた人の古着など人工物を積極的に搬入することが多く、その点からも他の猛禽類との巣との区別ができる。

防風林・河畔林

ニュウナイスズメ、シジュウカラ、キツツキ、アオジ（写真16）、ウグイス、アカハラ、キビタキ、コムクドリ、シマエナガ（写真17）、ゴジュウカラ（写真18）、カッコウなどが見られる。冬から春にはマヒワ、ウソ、アトリなどが飛来する。



写真16 アオジ（石狩川）



写真17 シマエナガ（スウェーデンヒルズ）



写真18 ゴジュウカラ（スウェーデンヒルズ）



写真19 オジロワシ（石狩川）

オジロワシ（写真19）は全長約1m、翼開長約2mの大型猛禽類で、名の通り尾羽が白い。ユーラシア大陸北部で繁殖し、冬季に北日本に飛来する冬鳥で、道内で越冬する個体数は約1700羽とされる（2010年）。一方で道北や道東では周年生息する個体があり、また石狩低地帯（特に石狩川下流域周辺）においても少数だが繁殖個体が見られる。石狩川下流

当別地区自然再生事業地にもよく出現する。

魚類、鳥類、哺乳類などを捕食するが、基本的にはスカベンジャー（動物の屍肉や魚類の死骸などを積極的に採食する動物）である。北海道では1954（昭和29）年に初めて繁殖が確認され、2008（平成20）年には全道で約150ペアの繁殖が認められている。当別町では西当別地区の防

風林で繁殖しており、石狩低地帯における重要な繁殖地のひとつとなっている。2021（令和3）年現在も西当別地区の防風林でひとつがいが繁殖しており、ほぼ毎年繁殖に成功しているものと見られている。当別町内での既知の営巣地は1カ所だが、石狩川下流部流域には他にも営巣地が点在している。

環境省および北海道では準絶滅危惧種に指定されているオオタカ（写真20）は「日本の鷹」を代表する種である。平地から山地にまで生息し、当別町では防風林ほか孤立林、丘陵林、山地林で繁殖している。2000（平成12）年前後の町内での営巣地は獅子内地区や高岡地区など6カ所であった。数年前までは太美防風林での営巣も確認されていたが、エゾモ



写真20 オオタカ（高岡）

モンガの撮影に大勢の人が訪れるようになって繁殖個体が姿を消した。樺戸山地でも繁殖行動が確認されている。本種は当別町域において一年を通じて生息しているが、山地から平地へ移動してくる個体、北方から渡って来る個体、積雪環境を避けて南下する個体などがいる。

1993（平成5）年に「国内希少野生動植物種」に指定されたが、その後個体数が増加し、都市部にも進出する個体なども認められるようになったため、2017（平成29）年には個体数の増加を理由に指定解除されている。

河川敷・牧草地・休耕田

ノビタキ（次頁写真21）、アオジ、ホオジロ、ホオアカ（次頁写真22）、オオジュリン（次頁写真23）、コヨシキリ、ベニマシコなどが優占する。希少な夏鳥としてウズラ、オオジシギ、冬鳥としてコミミズクが渡来する。

チョウゲンボウ（次頁写真24）は1993（平成5）年から1999（平成11）年にかけて、石狩川の札幌大橋主桁に設けられた箱桁の空洞部で繁殖した。巣に搬入された餌動物のうち、約60％がネズミであり、そのほとんどがエゾヤチネズミであった。その他40％はほとんどが鳥類で、スズメクラスの大きさの小型鳥類およびハクセキレイが中心であった。巣



写真21 ノビタキ (石狩川)



写真22 ホオアカ (石狩川)



写真23 オオジュリン (石狩川)

立ちした幼鳥の数は1993年から1997（平成9）年まで3羽、1998（平成10）年は4羽、1999年は5羽であった。

チュウヒ（写真25）は春に渡来し、秋に南方へ渡去する夏鳥の猛禽類である。体色は地域や個体による変異が大きい。両翼を斜上させたV字型のスタイルで草原上空を低空飛行し、ネズミを主とした小型哺乳類、両生類、爬虫類、また草地性・灌木性の鳥類、水域で水鳥や魚類などを捕食する。



写真24 チョウゲンボウ (札幌大橋)



写真25 チュウヒ (石狩川)

*3 環境省は、国内に生息・生育する絶滅のおそれのある野生生物のうち、人為の影響により存続に支障を来す事情が生じていると判断される種（または亜種・変種）を「国内希少野生動植物種」に指定している。また、「環境省レッドリストカテゴリー」において、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いものを「絶滅危惧ⅠB類」としている

日本では唯一湿性草地で繁殖するタカであり、当別町近隣では石狩川下流域のヨシ原の地上に枯草を積み重ねた巣をつくり、繁殖している。

本種の近年の繁殖データでは、北海道で117ペア、本州以南で19ペアの計136ペアが繁殖するのみで、うち道内での内訳はサロベツ原野58ペア、勇払原野20ペア、石狩川下流域15ペア、根釧地方11ペア、オホーツク海沿岸北部9ペア、十勝川河口域4ペアに過ぎず、国内希少野生動植物種および絶滅危惧IB類指定種^{*3}となっている。石狩川・当別川合流点付近で繁殖する本種の生息は貴重である。

近縁種ハイロチュウヒの国内での繁殖は確認されていないが、主に当別川周辺（自然再生事業地含む）に春の渡り時期に姿を見せる。飛来数は少ないが、毎年同地を通過しているのが観察されている。

河川域・池沼・ダム湖・湿地・水田

カワセミ、ショウドウツバメ、コチドリ、イソシギ、バン、オオバン、カイツブリ、カワウ、アオサギ、ダイサギなどが生息する。カイツブリは当別川と南1号橋間の三日月湖で繁殖している。ショウドウツバメ（写真26）は、かつてカワツバメと呼ばれていたもので、石狩川河岸の差泥質の土手に穴を掘りコロニー（集団営巣地）を作っている。

コハクチョウ（写真27）は毎年4月ころの雪どけ時期に北帰行途中の群れが水田や農耕地に飛来し、採食する。その他、オオハクチョウ、マガン（写真28）、ヒシクイが飛来する。これら大型水禽類の群れの往来は、春の訪れを知らせる静かな賑わいである。水田でアオサギが採食する光景も普通に見られる。ダイサギの飛来はかつてまれであったが、近年では飛



写真26 ショウドウツバメ（石狩川）



写真27 コハクチョウ（川下）



写真28 マガン（川下）

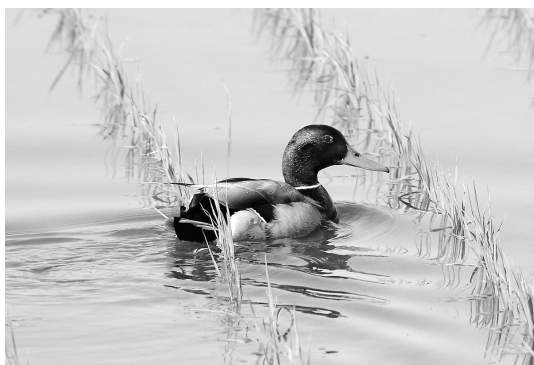


写真29 マガモ（太美）

来数が増えている。個体数は少ないが、アマサギが姿を見せることもある。

カモはマガモ（前頁写真29）、カルガモが水田地帯で普通。田おこしの時期に水田で採食するタカブシギ、アオアシシギ、トウネン、タシギなどのシギ類が見られることもある。まれな旅鳥として主に春季渡来するセイタカシギは、年によって飛来数が増えることもある。



写真30 アオサギ（石狩川）

アオサギ（写真30）は大型のサギで、北海道では普通に見られる。河川、湖沼、水田と水域を広く利用している。当別町の水田には毎年5月くらいから飛来し、6月中旬にかけて個体数が増加、7月上旬で最大となる。その後徐々に減少し、8月下旬以降はほとんど観察されなくなる。池沼では主に魚類を採食し、水田ではさかんにニホンアマガエルのオタマジャクシを捕食する。これは毎年6月

中旬から 8月中旬にあたり、この時期は本種の幼鳥の巣立ちの 1カ月前後に相当することから、アオサギにとって水田環境のニホンアマガエルが重要な餌資源となっていることがわかる。

丘陵・山地（森林帯）

丘陵林から低山に生息する林地性の小中型鳥類の構成種は、防風林や河畔林の生息種との共通種も多い。シジュウカラ、キツツキ、キビタキ、オオルリなどのヒタキ、アカハラ、クロツグミ、トラツグミなどのツグミ、コムクドリ、キバシリ、ツツドリなどが見られる。

ノスリは農耕地や河川敷などの開放地で、主にネズミを捕食しているタカである。ハンティングの際、頻繁に停空飛翔を行う。当別町域では材木沢、スウェーデンヒルズ周辺林内等丘陵地の林で繁殖している。

秋の渡り時期（10月中下旬）になると、スウェーデンヒルズ上空を山地伝いに次々と南下していくノスリの群れが見られる。ハイタカ（次頁写真31）やハチクマの姿も混じる。阿蘇岩山周辺で「鷹柱」（タカの群れが上昇気流に乗って竜巻状に旋回上昇し柱のように見える状態）が見られることもあり、増毛山地から延びている稜線上がタカの日本海側の移動コースとなっていることがうかがわれる。



写真31 ハイトカ（石狩川）

ハイトカはオオタカによく似た猛禽類である。当別町域では丘陵部や農耕地周辺の分断化された孤立林などで繁殖が確認されている。エゾマツなどの常緑針葉樹を好み、オオタカよりも立木密度の高い若齢林^{じゃくれいりん}に営巣する。冬季には住宅地の上空や人家の庭先に姿を見せることもある。

エゾフクロウ（次頁写真32）は主に夜行性（ただし森林内では日中に行動することもある）のため人目に触れる機会はあまり多くないが、その知名度は高く、当別町の「町の鳥」にもなっている。ユーラシア大陸北部に広く分布し、温帯から亜寒帯にかけての森林環境に生息する。森の鳥であるが、ネズミを主とした小型哺乳類のほか、鳥類、カエルなどの両生類、トカゲなどの爬虫類、昆虫などを捕食するため、森林域から離れた湿地や牧草地、農耕地などにもしばしば姿を見せる。留鳥として定住性が強いとされる。

日本に生息するフクロウは1種のみであるが、亜種レベルでは現在四つの亜種に分けられており、うち北海道に生息する亜種がエゾフクロウと呼ばれている。平地から山地の森林に生息し、市街地であっても大木のある社寺林や公園林などがあれば生息していることがある。防風林や河畔林、丘陵林、山間の休耕田周辺の疎林など、さまざまなタイプの林地を利用している。巣は大木の樹洞を利用することが多いが、樹洞が得られない場合は折れた大木の幹上や樹木の根元、地上の穴などを利用して繁殖することが知られている。鳴声はほぼ年間を通して聴くことができるが、秋と春先（繁殖初期）には特によく発声し、営巣地周辺ではペアによるさかんな鳴き交わしが響く。当別町域での分布状況は詳らかに^{つまび}されていない。

日本最大のキツツキであるクマゲラ（写真33）は、国内では北海道と東北の一部にのみ生息する希少種である。全身が黒色であるため、特に積雪期の森林では林間を飛翔する姿を目視しやすい。また採食時に樹幹を突く音もよく響くため、発見は比較的容易である。雌雄共に頭上の「赤いベレー帽」がトレードマークで、雄がくちばしの近くまで赤いことに対し、雌は赤の範囲が短く、頭頂部は黒いことが雌雄判別のポイントである。



写真32 エゾフクロウ（「道民の森」神居尻地区） 写真33 クマゲラ（西当別地区防風林）

表5 当別町とその近隣で記録された野鳥

	目名	科名	和名 学名	渡来 区分	市街地 農耕地	防風林 河畔林	河川敷 牧草地 休耕地	河川域 池沼ダム湖 湿地・水田	丘陵・ 山地 (森林帯)	備考
1	キジ目	キジ科	エゾライチョウ <i>Tetrastes bonasia</i>	周年					●	道民の森ほか山林に生息
2			ウズラ <i>Coturnix coturnix</i>	夏			●			
3			コウライキジ <i>Phasianus colchicus karpowi</i>	周年	●	●	●			国外外来種
4	カモ目	カモ科	ヒシクイ <i>Anser fabalis serrirostris</i>	旅	●		●	●		
5			マガン <i>Anser albifrons albifrons</i>	旅	●		●	●		
6			シジュウカラガン <i>Branta canadensis leucopareia</i>	希旅			●	●		希少種
7			コハクチョウ <i>Cygnus columbianus</i>	旅	●		●	●		春季に当別川下流域に多数 渡来、農耕地で採食
8			オオハクチョウ <i>Cygnus cygnus</i>	旅	●		●	●		
9			ツクシガモ <i>Tadorna tadorna</i>	迷				●		1991年石狩市生振茅戸川
10			オシドリ <i>Aix galericulata</i>	夏	●	●	●	●		樹洞で繁殖
11			オカヨシガモ <i>Anas strepera strepera</i>	旅				●		
12			ヨシガモ <i>Anas falcata</i>	旅				●		
13			ヒドリガモ <i>Anas penelope</i>	旅／冬				●		春秋に多数渡来
14			アメリカヒドリ <i>Anas americana</i>	希旅				●		
15			マガモ <i>Anas platyrhynchos platyrhynchos</i>	周年	●		●	●		春秋に多数渡来
16			カルガモ <i>Anas poecilorhyncha</i>	夏	●		●	●		
17			ハシビロガモ <i>Anas chryseata</i>	旅				●		
18			オナガガモ <i>Anas acuta</i>	旅／冬				●		春秋に多数渡来
19			シマアジ <i>Anas querquedula</i>	希旅				●		
20			トモエガモ <i>Anas formosa</i>	希旅				●		
21			コガモ <i>Anas crecca crecca</i>	旅／冬				●		春秋に多数渡来
22			ホシハジロ <i>Aythya ferina</i>	旅				●		
23			キンクロハジロ <i>Aythya fuligula</i>	周年				●		
24			スズガモ <i>Aythya marila marila</i>	旅				●		
25			シノリガモ <i>Histrionicus histrionicus</i>	冬				●		過去に当別川上流域での繁 殖情報あり
26			ホオジロガモ <i>Bucephala clangula clangula</i>	旅／冬				●		
27			ミコアイサ <i>Mergus albellus</i>	冬				●		
28			カワアイサ <i>Mergus merganser merganser</i>	冬／周				●		過去に当別川上流域での繁 殖情報あり
29			ウミアイサ <i>Mergus serrator</i>	冬				●		
30	カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ <i>Tachybaptus ruficollis poggei</i>	夏				●		
31			アカエリカイツブリ <i>Podiceps grisegena holbollii</i>	夏				●		一部越冬
32			カンムリカイツブリ <i>Podiceps cristatus cristatus</i>	希冬				●		
33			ミミカイツブリ <i>Podiceps auritus auritus</i>	冬／旅				●		
34			ハジロカイツブリ <i>Podiceps nigricollis nigricollis</i>	冬／旅				●		

35			カワラバト (ドバト) <i>Columba livia</i>	周年	●		●			国外外来種
36	ハト目	ハト科	キジバト <i>Streptopelia orientalis orientalis</i>	夏	●	●	●		●	
37			アオバト <i>Treron sieboldii sieboldii</i>	夏	●	●			●	
38	コウノトリ目	コウノトリ科	コウノトリ <i>Ciconia ciconia</i>	希夏			●	●		2015年石狩市北生振 2021年当別町ビトエ
39	カツオドリ目	ウ科	カワウ <i>Phalacrocorax carbo hanedae</i>	旅/夏				●		近年渡来数増加
40			ウミウ <i>Phalacrocorax filamentosus</i>	周年				●		
41	ペリカン目	ペリカン科	モモイロペリカン <i>Pelecanus onocrotalus</i>	—				●		1998-1999年札幌大橋付近 (飼育下個体が逃げたもの)
42		サギ科	サンカノゴイ <i>Botaurus stellaris stellaris</i>	希夏				●		希少種/1999年石狩市生振
43			オオヨシゴイ <i>Ixobrychus eurhythmus</i>	希夏				●		2000年札幌大橋左岸
44			ゴイサギ <i>Nycticorax nycticorax nycticorax</i>	希夏		●		●		2006年石狩川公園
45			アマサギ <i>Bubulcus ibis coromandus</i>	夏	●			●		2018年当別町ビトエ
46			アオサギ <i>Ardea cinerea jouyi</i>	夏	●		●	●		一部越冬/近年飛来数増加
47		サギ科	ダイサギ <i>Ardea alba</i>	夏	●		●	●		一部越冬/近年飛来数増加
48			チュウサギ <i>Egretta intermedia intermedia</i>	希夏	●		●	●		
49			コサギ <i>Egretta garzetta garzetta</i>	希夏				●		
50			カラシラサギ <i>Egretta eulophotes</i>	希旅				●		1998年当別
51		トキ科	ヘラサギ <i>Platalea leucorodia leucorodia</i>	迷				●		2016-2018・2020年石狩市北 生振(調整池)
52			クロツラヘラサギ <i>Platalea minor</i>	迷				●		2007・2017年石狩市八幡
53	ツル目	ツル科	タンチョウ <i>Grus japonensis</i>	周年			●	●		2020年石狩川・当別川合流点 付近上空・2021年も当別町に 飛来
54			ナベヅル <i>Grus monacha</i>	迷			●	●		2013年当別町金沢
55		クイナ科	クイナ <i>Rallus aquaticus indicus</i>	夏				●		
56			ヒクイナ <i>Porzana fusca erythrothorax</i>	夏				●		2006年札幌大橋左岸
57			バン <i>Gallinula chloropus chloropus</i>	夏				●		
58			オオバン <i>Fulica atra atra</i>	旅/冬				●		近年渡来数増加
59	カッコウ目	カッコウ科	ジュウイチ <i>Hierococcyx fugax</i>	夏					●	
60			ツツドリ <i>Cuculus saturatus</i>	夏	●	●			●	
61			カッコウ <i>Cuculus canorus telephonus</i>	夏	●	●	●			
62	ヨタカ目	ヨタカ科	ヨタカ <i>Caprimulgus indicus jotaka</i>	夏			●		●	
63	アマツバメ目	アマツバメ科	ハリオアマツバメ <i>Hirundapus caudacuta caudacutus</i>	夏	●		●		●	
64			キタアマツバメ <i>Apus pacificus pacificus</i>	夏	●		●		●	
65	チドリ目	チドリ科	タゲリ <i>Vanellus vanellus</i>	希旅			●	●		2009年石狩川・当別川合流 点付近、2020年石狩市生振
66			ムナグロ <i>Pluvialis dominica</i>	旅			●	●		
67			ダイゼン <i>Pluvialis squatarola</i>	旅				●		
68			ハジロコチドリ <i>Charadrius hiaticula tundrae</i>	希旅				●		2010年当別町ビトエ
69			コチドリ <i>Charadrius dubius curonicus</i>	夏	●		●	●		
70			オオメダイチドリ <i>Charadrius leschenaultii</i>	迷				●		1998年当別町ビトエ

第1部 自然環境

	目名	科名	和名 学名	渡来 区分	市街地 農耕地	防風林 河畔林	河川敷 牧草地 休耕地	河川域 池沼ダム湖 湿地・水田	丘陵・ 山地 (森林帯)	備考
71	チドリ目	セイタカシギ科	セイタカシギ <i>Himantopus himantopus himantopus</i>	希旅	●		●	●		希少種／1998年江別市角山、2006年当別川河口、2011年当別町ビトエ
72		シギ科	ヤマシギ <i>Scolopax rusticola</i>	夏		●			●	
73			アオシギ <i>Gallinago solitaria japonica</i>	冬				●		2018年石狩市生振（石狩川河川敷）
74			オオジシギ <i>Gallinago hardwickii</i>	夏	●		●	●		希少種／当別川・石狩川河川敷に飛来・2005年頃まではスウェーデンヒルズにも生息
75			タシギ <i>Gallinago gallinago gallinago</i>	旅			●	●		
76			オオハシシギ <i>Limnodromus scolopaceus</i>	希旅				●		2010・2012年当別町ビトエ
77			オグロシギ <i>Limosa limosa melanuroides</i>	旅				●		
78			オオソリハシシギ <i>Limosa lapponica baueri</i>	旅				●		
79			ホウロクシギ <i>Numenius madagascariensis</i>	旅				●		2010年当別町ビトエ
80			ツルシギ <i>Tringa erythropus</i>	旅				●		2010年当別町ビトエ
81			アカアシシギ <i>Tringa totanus ussuriensis</i>	希旅				●		2010年当別町ビトエ
82			コアカアシシギ <i>Tringa stagnatilis</i>	旅				●		2010年当別町ビトエ
83			アオアシシギ <i>Tringa nebularia</i>	旅				●		
84			クサシギ <i>Tringa ochropus</i>	希旅				●		
85			タカブシギ <i>Tringa glareola</i>	旅	●		●	●		2010年当別町ビトエ
86			キアシシギ <i>Heteroscelus brevipes</i>	旅				●		内水面では少数
87			ソリハシシギ <i>Xenus cinereus</i>	旅				●		
88			イソシギ <i>Actitis hypoleucos</i>	夏	●		●	●		
89			コオバシギ <i>Calidris canutus rogersi</i>	旅				●		
90			トウネン <i>Calidris ruficollis</i>	旅				●		
91			ヨーロッパトウネン <i>Calidris minuta</i>	迷				●		1997年当別町石狩川
92			オジロトウネン <i>Calidris temminckii</i>	希旅				●		2010年当別町ビトエ
93			ヒバリシギ <i>Calidris minutilla</i>	旅				●		
94			アメリカウズラシギ <i>Calidris melanotos</i>	希旅				●		2010年当別町ビトエ
95			ウズラシギ <i>Calidris acuminata</i>	希旅				●		
96			サルハマシギ <i>Calidris ferruginea</i>	希旅				●		2010年当別町ビトエ
97			ハマシギ <i>Calidris alpina sakhalina</i>	旅				●		
98			アシナガシギ <i>Calidris himantopus</i>	迷				●		1993年石狩市生振
99			キリアイ <i>Limicola falcinellus sibirica</i>	希旅				●		
100			コモンシギ <i>Tryngites subruficollis</i>	迷				●		2012年石狩市北生振
101			エリマキシギ <i>Philomachus pugnax</i>	希旅				●		
102			アカエリヒレアシシギ <i>Phalaropus lobatus</i>	希旅				●		
103		レンカク科	レンカク <i>Hydrophasianus chirurgus</i>	迷				●		2015年篠路拓北・茨戸川
104		ツバメチドリ科	ツバメチドリ <i>Glareola maldivarum</i>	希旅			●	●		2013年石狩市八幡

105	チドリ目	カモメ科	ユリカモメ <i>Larus ridibundus</i>	旅			●	●		
106			ウミネコ <i>Larus crassirostris</i>	夏			●	●		主に海岸域に生息
107			カモメ <i>Larus canus kamtschatschensis</i>	冬			●	●		
108			シロカモメ <i>Larus hyperboreus pallidissimus</i>	冬			●	●		主に海岸域に生息
109			セグロカモメ <i>Larus argentatus vegae</i>	冬				●		
110			オオセグロカモメ <i>Larus schistisagus</i>	周年	●		●	●		
111			コアジサシ <i>Sterna albifrons sinensis</i>	迷				●		
112			アジサシ <i>Sterna hirundo longipennis</i>	旅				●		
113			クロハラアジサシ <i>Chlidonias hybridus longipennis</i>	迷				●		2010年石狩市生振、2015年石狩市八幡、2020年茨戸川緑地
114			ハジロクロハラアジサシ <i>Chlidonias leucopterus</i>	迷				●		2011・2012年石狩市北生振、2015年当別川河口
115	タカ目	ミサゴ科	ミサゴ <i>Pandion haliaetus haliaetus</i>	夏				●		希少種
116		タカ科	ハチクマ <i>Pernis apivorus orientalis</i>	夏	●				●	山林で繁殖するほか秋の渡り時期に通過
117			トビ <i>Milvus migrans lineatus</i>	周年	●	●	●	●	●	
118			オジロワシ <i>Haliaeetus albicilla albicilla</i>	周年	●	●	●	●	●	希少種／太美防風林で繁殖
119			オオワシ <i>Haliaeetus pelagicus</i>	冬		●	●	●	●	希少種
120			チュウヒ <i>Circus spilonotus spilonotus</i>	夏	●		●	●		希少種／石狩川・当別川合流点付近のヨシ原で繁殖
121			ハイイロチュウヒ <i>Circus cyaneus cyaneus</i>	希冬	●		●	●		2007・2010年石狩川・当別川合流点付近
122			マダラチュウヒ <i>Circus melanoleucos</i>	迷			●	●		1996年石狩川、1998年石狩市生振、2015年石狩川・当別川合流点付近、2020年茨戸川緑地
123			ツミ <i>Accipiter gularis gularis</i>	周年	●	●			●	
124			ハイタカ <i>Accipiter nisus nisosimilis</i>	周年	●	●	●		●	針葉樹の孤立林で繁殖。庭に飛来することもある
125			オオタカ <i>Accipiter gentilis fujiyamae</i>	周年	●	●	●	●	●	町内各所の防風林、孤立林で繁殖
126			ノスリ <i>Buteo buteo japonicus</i>	周年	●	●	●		●	スウェーデンヒルズ丘陵林、材木沢などで繁殖
127			ケアシノスリ <i>Buteo lagopus menzbieri</i>	冬			●			2020年札幌大橋
128			クマタカ <i>Nisaetus nipalensis orientalis</i>	周年					●	希少種／スウェーデンヒルズでも飛来例
129		フクロウ科	コノハズク <i>Otus scops japonicus</i>	夏					●	道民の森ほか・山林に生息
130			シロフクロウ <i>Bubo scandiaca</i>	希冬			●			2002年石狩市生振（石狩川河川敷）
131			エゾフクロウ <i>Strix uralensis japonica</i>	周年		●	●		●	防風林・孤立林・スウェーデンヒルズにも生息
132			アオバズク <i>Ninox scutulata japonica</i>	夏		●			●	
133			トラフズク <i>Asio otus otus</i>	夏	●	●				1999年石狩市生振
134			コミミズク <i>Asio flammeus flammeus</i>	冬			●			2009・2015年石狩川・当別川合流点付近
135	サイチョウ目	ヤツガシラ科	ヤツガシラ <i>Upupa epops saturata</i>	希夏			●			2020年石狩市生振
136	ブッポウソウ目	カワセミ科	アカショウビン <i>Halcyon coromanda</i>	夏				●		1983年当別ダム環境影響評価調査
137			カワセミ <i>Alcedo atthis bengalensis</i>	夏				●		
138			エゾヤマセミ <i>Megaceryle lugubris pallida</i>	周年				●		当別川中～上流域に生息
139	キツツキ目	キツツキ科	アリスイ <i>Jynx torquilla japonica</i>	夏		●	●		●	

第1部 自然環境

	目名	科名	和名 学名	渡来 区分	市街地 農耕地	防風林 河畔林	河川敷 牧草地 休耕地	河川域 池沼ダム湖 湿地・水田	丘陵・ 山地 (森林帯)	備考
140	キツツキ目	キツツキ科	エゾコゲラ <i>Dendrocopos kizuki seebohmi</i>	周年	●	●			●	
141			コアカゲラ <i>Dendrocopos minor</i>	周年		●	●			石狩川・当別川合流点付近 の河畔林
142	キツツキ目	キツツキ科	エゾオオアカゲラ <i>Dendrocopos leucotos subcirris</i>	周年		●			●	
143			エゾアカゲラ <i>Dendrocopos major japonicus</i>	周年	●	●	●		●	
144			クマガゲラ <i>Dryocopus martius martius</i>	周年		●			●	希少種／スウェーデンヒル ズ丘陵林にも生息
145			ヤマゲラ <i>Picus canus jessoensis</i>	周年		●			●	
146	ハヤブサ目	ハヤブサ科	チョウゲンボウ <i>Falco tinnunculus interstinctus</i>	周年	●	●	●			1993～1999年札幌大橋主桁 右岸部での連続繁殖例
147			コチョウゲンボウ <i>Falco columbarius insignis</i>	冬	●		●			2008・2010年石狩川・当別 川合流点付近
148			チゴハヤブサ <i>Falco subbuteo subbuteo</i>	夏	●	●	●		●	1995年、1998年に19線南1号 電波塔上での繁殖例
149			ハヤブサ <i>Falco peregrinus japonensis</i>	周年	●		●	●	●	希少種
150	スズメ目	モズ科	モズ <i>Lanius bucephalus bucephalus</i>	夏	●	●	●		●	
151			アカモズ <i>Lanius cristatus superciliosus</i>	夏		●	●			希少種
152			オオモズ <i>Lanius excubitor bianchii</i>	希冬			●			
153		カラス科	ミヤマカケス <i>Garrulus glandarius brandtii</i>	周年	●	●			●	
154			カササギ <i>Pica pica serica</i>	周年	●	●				太美町／近年分布域拡大／ 国内外来種
155			コクマルガラス <i>Corvus dauuricus</i>	迷	●		●			2017年スウェーデンヒルズ
156			ミヤマガラス <i>Corvus frugileus pastinator</i>	希冬	●		●			2009・2010年石狩川・当別 川合流点付近
157			ハシボソガラス <i>Corvus corone orientalis</i>	周年	●	●	●	●	●	
158			ハシブトガラス <i>Corvus macrorhynchos japonensis</i>	周年	●	●	●	●	●	
159		キクイタダキ科	キクイタダキ <i>Regulus regulus japonensis</i>	周年	●	●			●	
160		シジュウカラ科	ハシブトガラ <i>Poecile palustris hensoni</i>	周年	●	●			●	
161			コガラ <i>Poecile montanus restrictus</i>	周年	●	●			●	
162			ヤマガラ <i>Poecile varius varius</i>	周年	●	●			●	
163			ヒガラ <i>Periparus ater insularis</i>	周年	●	●			●	
164			シジュウカラ <i>Parus minor minor</i>	周年	●	●			●	
165		ヒバリ科	コヒバリ <i>Calandrella cheleensis cheleensis</i>	迷			●			2003年当別町ビトエ
166			ヒバリ <i>Alauda arvensis japonica</i>	夏	●		●			
167		ツバメ科	ショウドウツバメ <i>Riparia riparia ijimae</i>	夏				●		石狩川岸の砂泥質崖で集団 繁殖
168			ツバメ <i>Hirundo rustica gutturalis</i>	夏	●		●	●		
169			コシアカツバメ <i>Hirundo daurica japonica</i>	夏				●		
170			イワツバメ <i>Delichon dasypus dasypus</i>	夏	●		●	●		
171		ヒヨドリ科	ヒヨドリ <i>Hypsipetes amaurotis amaurotis</i>	周年	●	●			●	
172		ウグイス科	ウグイス <i>Cettia diphone cantans</i>	夏	●	●	●		●	
173			ヤブサメ <i>Urosphena squameiceps</i>	夏		●			●	
174		エナガ科	シマエナガ <i>Aegithalos caudatus japonicus</i>	周年	●	●			●	

175	スズメ目	ムシクイ科	オオムシクイ <i>Phylloscopus examinandus</i>	旅	●	●			●	
176			エゾムシクイ <i>Phylloscopus tenellipes</i>	夏		●			●	
177			センダイムシクイ <i>Phylloscopus occipitalis</i>	夏		●			●	
178		メジロ科	メジロ <i>Zosterops japonicus japonicus</i>	夏	●	●			●	
179		センニュウ科	マキノセンニュウ <i>Locustella lanceolata</i>	夏			●			石狩川・当別川合流点付近の草地
180			シマセンニュウ <i>Locustella ochotensis</i>	夏			●			石狩川・当別川合流点付近の草地
181			エゾセンニュウ <i>Locustella fasciolata amnicola</i>	夏	●	●	●		●	当別川河畔林など
182		ヨシキリ科	オオヨシキリ <i>Acrocephalus arundinaceus</i>	夏			●	●		
183			コヨシキリ <i>Acrocephalus bistrigiceps bistrigiceps</i>	夏			●	●		
184		レンジャク科	キレンジャク <i>Bombycilla garrulus</i>	旅	●	●			●	
185			ヒレンジャク <i>Bombycilla japonica</i>	旅	●	●			●	
186		ゴジュウカラ科	シロハラゴジュウカラ <i>Sitta europaea asiatica</i>	周年	●	●			●	
187		キバシリ科	キタキバシリ <i>Certhia familiaris daurica</i>	周年		●			●	
188		ミソサザイ科	ミソサザイ <i>Troglodytes troglodytes fumigatus</i>	周年		●			●	
189		ムクドリ科	ムクドリ <i>Spodiopsar cineraceus</i>	周年	●	●	●		●	
190			コムクドリ <i>Agropsar philippensis</i>	夏	●	●			●	
191			ホシムクドリ <i>Sturnus vulgaris poltaratskyi</i>	迷		●	●			2020年石狩市生振
192		カワガラス科	カワガラス <i>Cinclus pallasi pallasi</i>	周年				●		
193		ヒタキ科	マミジロ <i>Zoothera sibiricus davisoni</i>	夏					●	
194			トラツグミ <i>Zoothera dauma aurea</i>	夏		●			●	
195			クロツグミ <i>Turdus cardis</i>	夏		●			●	
196			マミチャジナイ <i>Turdus obscurus</i>	旅		●			●	
197			シロハラ <i>Turdus pallidus</i>	旅		●			●	
198			アカハラ <i>Turdus chrysolaus chrysolaus</i>	夏		●			●	
199			ツグミ <i>Turdus naumanni eunomus</i>	冬	●	●	●		●	
200			ハチジョウツグミ <i>Turdus naumanni naumanni</i>	希冬	●	●			●	
201			コマドリ <i>Luscinia akahige akahige</i>	夏					●	
202			オガワコマドリ <i>Luscinia svecica svecica</i>	迷		●	●			1998年、2003年石狩市生振
203			ノゴマ <i>Luscinia calliope</i>	夏	●	●	●		●	
204			コルリ <i>Luscinia cyane</i>	夏		●			●	
205			ルリビタキ <i>Tarsiger cyanurus cyanurus</i>	旅/夏		●			●	
206			ジョウビタキ <i>Phoenicurus aureus aureus</i>	希冬	●	●			●	2006年当別川河口
207			ノビタキ <i>Saxicola torquata stejnegeri</i>	夏	●		●			
208			イソヒヨドリ <i>Monticola solitarius philippensis</i>	夏	●			●		
209			エゾビタキ <i>Muscicapa griseisticta</i>	旅		●			●	
210			サメビタキ <i>Muscicapa sibirica sibirica</i>	夏					●	

第1部 自然環境

	目名	科名	和名 学名	渡来 区分	市街地 農耕地	防風林 河畔林	河川敷 牧草地 休耕地	河川域 池沼ダム湖 湿地・水田	丘陵・ 山地 (森林帯)	備考
211	スズメ目	ヒタキ科	コサメビタキ <i>Muscicapa dauurica dauurica</i>	夏		●			●	
212			キビタキ <i>Ficedula narcissina narcissina</i>	夏		●			●	
213			ムギマキ <i>Ficedula mugimaki</i>	希旅		●			●	
214			オオルリ <i>Cyanoptila cyanomelana cyanomelana</i>	夏		●			●	
215		イワヒバリ科	ヤマヒバリ <i>Prunella montanella</i>	希旅			●			1999年石狩市生振
216			カヤクグリ <i>Prunella rubida</i>	冬/周		●			●	
217		スズメ科	ニューナイスズメ <i>Passer rutilans rutilans</i>	周年	●	●				
218			スズメ <i>Passer montanus saturatus</i>	周年	●	●	●			
219		セキレイ科	ツメナガセキレイ <i>Motacilla flava saturatus</i>	希旅				●		2019・2020年石狩市北生振
220			キセキレイ <i>Motacilla cinerea cinerea</i>	夏	●		●	●	●	
221			ハクセキレイ <i>Motacilla alba lugens</i>	周年	●		●	●		
222			セグロセキレイ <i>Motacilla grandis</i>	夏				●		
223			ビンズイ <i>Anthus hodgsoni hodgsoni</i>	夏		●			●	
224			ムネアカタヒバリ <i>Anthus cervinus</i>	希旅			●	●		2018年当別町ビトエ
225			タヒバリ <i>Anthus rubescens japonicus</i>	旅			●	●		
226		アトリ科	アトリ <i>Fringilla montifringilla</i>	旅/冬	●	●	●		●	
227			カワラヒワ <i>Chloris sinica minor</i>	夏	●	●	●		●	
228			マヒワ <i>Carduelis spinus</i>	周年	●	●			●	
229			ベニヒワ <i>Carduelis flammea flammea</i>	冬	●	●	●		●	
230			ハギマシコ <i>Leucosticte arctoa brunneonucha</i>	冬		●	●		●	
231			ベニマシコ <i>Uragus sibiricus sanguinolentus</i>	夏	●	●	●		●	
232			アカマシコ <i>Carpodacus erythrurus grebnitskii</i>	希冬		●			●	1998年、2006年石狩市生振
233			オオマシコ <i>Carpodacus roseus</i>	冬		●			●	2010年太美防風林
234			ギンザンマシコ <i>Pinicola enucleator sakhalinensis</i>	冬	●	●			●	
235			イスカ <i>Loxia curvirostra japonica</i>	冬		●			●	
236			ウソ <i>Pyrrhula pyrrhula griseiventris</i>	周/冬	●	●			●	
237			シメ <i>Coccothraustes coccothraustes japonicus</i>	周年	●	●			●	
238			イカル <i>Eophona personata personata</i>	夏		●			●	
239		ツメナガホオジロ科	ユキホオジロ <i>Plectrophenax nivalis personata</i>	冬			●			
240			シラガホオジロ <i>Emberiza leucocephala leucocephala</i>	希冬			●			1999年石狩市生振
241		ホオジロ科	ホオジロ <i>Emberiza cioides ciopsis</i>	夏	●	●	●			
242			ホオアカ <i>Emberiza fucata fucata</i>	夏			●			
243			コホオアカ <i>Emberiza pusilla</i>	希冬			●			2004年石狩市生振

244	スズメ目	ホオジロ科	カシラダカ <i>Emberiza rustica latifascia</i>	旅／冬	●	●	●		●	
245			ミヤマホオジロ <i>Emberiza elegans elegans</i>	冬		●	●			
246			シマアオジ <i>Emberiza aureola ornata</i>	夏			●			希少種／2006年まで石狩川 河川敷で確認
247			アオジ <i>Emberiza spodocephala personata</i>	夏	●	●	●		●	
248			クロジ <i>Emberiza variabilis</i>	夏					●	
249			シベリアジュリン <i>Emberiza pallasi polaris</i>	迷			●			1999年石狩市生振
250			オオジュリン <i>Emberiza schoeniclus pyrrhulina</i>	夏			●	●		

※渡来区分

周年一年間を通して見られる（ただし同個体が定着しているとは限らない）

夏（夏鳥）－春から秋にかけて見られる

希夏－希に渡来する夏鳥

冬（冬鳥）－秋から春にかけて見られる

希冬－希に渡来する冬鳥

旅（旅鳥）－春と秋に通過していく鳥

希旅－希に渡来する旅鳥

迷（迷鳥）－迷行してきた鳥（本来は見られない）

第3節 魚類および底生動物

当別町に生息する魚類36種を次頁表6に示した。分布域のカテゴリーは下流側から「石狩川・当別川合流点付近」・「同域池沼」・「水田・水路・農業用ため池・川跡池沼」・「当別川下流域」・「同中流域」・「同上流域」に大別した。本節では当別川における特徴的な魚種についてのみ紹介する。

ヤツメウナギ、ヤチウグイなど

石狩川水系はカワヤツメが遡上する。当別川においても「どう」と呼ばれるワナを用いた独特な漁法が行われていた。本種はヤツメウナギ科ヤツメウナギ属に属し、一般にはヤツメまたはヤツメウナギと呼ばれる。口は吸盤状であごを持たず、胸鰭も腹鰭もない。目の後ろに一列に並ぶ7個の鰓^{えら}穴を「眼」に見立て、それらと本来の眼を合わせて「八眼」の名称がある。

『平成19年度環境影響評価技術手法（人と自然との触れ合い関連）調査業務報告書』収録の「自然とのふれあい活動」によれば、当別川の下流域ではかつて住民が現在の当別大橋付近でカワヤツメを釣って食べていたとある。また篠津川へ延びる水路である二十五線川においても同様である。1969（昭和44）年発行の『茂平沢80年の歩み』では「明治の末頃青山共有地の曾根さんが渡し船守をしていた頃八目うなぎを渡し船に一杯手づかみしたというウソのような本当の話がある」との記述が見られ、『当別町史』には「八ツ目ウナギは石狩川当別川などにおり、6月頃が最盛期であるが、当別川は汚濁化により年々その数が少なくなってきた」とある。また『ビトエ開拓百周年記念誌 風雪百年』（1983年）には、大正中期の話として『^ど筈』を使用したヤツメウナギ漁が定着する。ヤツメ漁とは独特の漁法で、カヤを円錐状に編んだ『筈』を川底に沈め、その中でヤツメを捕獲する方法で、新潟県、福島県から移住した漁民がこの漁法を伝えたという」とある。過去には相当数のカワヤツメが当別川を遡上していたことがうかがわれる。

湿地の池沼や水田の水路、農業用の貯水池（ため池）といった昔なが

らの環境下に生息する希少種に、ヤチウグイ、フクドジョウ、エゾホトケドジョウ、エゾトミヨなどがいる。ヤチウグイは三日月湖（河跡湖）にも多く見られ、水際に水草などの繁茂する緩流～止水域環境を好む。フクドジョウ、エゾホトケドジョウ、エゾトミヨはいずれも湿地を流れる流速の緩やかな細流や古くから残存する谷津田の池沼に見られる。エゾホトケドジョウは北海道レッドリストの絶滅危惧種であり、エゾトミヨは準絶滅危惧種である。

表6 当別町に生息する魚類

	目名	科名	和名 学名	石狩・当 別川合流 点付近	石狩・当別 川合流点 付近池沼	水田・ 用水路 ため池	当別川 下流域	当別川 中流域	当別川 上流域	備考
1	ヤツメウナギ目	ヤツメウナギ科	カワヤツメ <i>Lethenteron camtchaticum</i>	●			●			準絶滅危惧種（道指定）
2	コイ目	コイ科	コイ <i>Cyprinus carpio</i>	●	●	●	●	●		国内外来種
3			ゲンゴロウブナ <i>Carassius cuvieri</i>	●	●	●	●	●		国内外来種
4			キンブナ <i>Carassius auratus subsp.2</i>		●	●	●			国内外来種
5			ギンブナ <i>Carassius sp.</i>	●	●	●	●	●		
6			タイリクバラタナゴ <i>Rhodeus ocellatus ocellatus</i>	●	●	●	●			国外外来種
7			ヤチウグイ <i>Phoxinus phoxinus sachalinensis</i>		●	●				準絶滅危惧種（道指定）
8			ジュウサンウグイ <i>Pseudorasbora brandtii brandtii</i>	●	●		●			マルタウグイと呼ばれていたもの
9			エゾウグイ <i>Tribolodon sachalinensis</i>			●		●	●	
10			ウグイ <i>Tribolodon hakonensis</i>	●	●	●	●	●	●	
11			モツゴ <i>Pseudorasbora parva</i>	●	●	●	●	●		国内外来種
12			タモロコ <i>Gnathopogon elongatus elongatus</i>	●	●					国内外来種
13	ドジョウ科	ドジョウ科	ドジョウ <i>Misgurnus anguillicaudatus</i>	●	●	●	●			国内外来種
14			フクドジョウ <i>Noemacheilus barbatulus toni</i>	●			●	●	●	
15			エゾホトケドジョウ <i>Lefua nikkonis</i>		●	●				湿地帯の池沼、細流／絶滅危惧種
16	サケ目	ナマズ科	ナマズ <i>Silurus asotus</i>	●	●	●	●			国内外来種
17		キュウリウオ科	ワカサギ <i>Hypomesus nipponensis</i>	●	●		●			
18			イシカリワカサギ <i>Hypomesus olidus</i>	●	●		●			
19		サケ科	アメマス（エゾイワナ） <i>Salvelinus leucomaenis leucomaenis</i>					●	●	エゾイワナは当別川中流～上流域とその支流
20			サクラマス（ヤマメ） <i>Oncorhynchus masou masou</i>					●	●	ヤマメは当別川中流～上流域とその支流
21			ニジマス <i>Oncorhynchus mykiss</i>					●	●	国外外来種
22	トゲウオ目	トゲウオ科	ニホンイトヨ <i>Gasterosteus nipponicus sp. nov.</i>	●	●	●	●			
23			エゾトミヨ <i>Pungitius tymensis</i>		●					湿地帯の池沼、細流／準絶滅危惧種（道指定）
24			トミヨ属淡水型 <i>Pungitius sp.1</i>	●	●	●	●			
25	ボラ目	ボラ科	メナダ <i>Chelon haematocheilus</i>	●						

表6 (続き)

26	スズキ目	カジカ科	カンキョウカジカ <i>Cottus hangiongensis</i>				●	●		旧カサゴ目
27			ハナカジカ <i>Cottus nozawae</i>					●	●	旧カサゴ目
28		ハゼ科	マハゼ <i>Acanthogobius flavimanus</i>	●						
29			アシンロハゼ <i>Acanthogobius lactipes</i>	●						
30			ルリヨシノボリ <i>Rhinogobius mizunoi</i>					●	●	準絶滅危惧種(道指定)
31	スズキ目	ハゼ科	クロダハゼ <i>Gymnogobius kurodai</i>	●	●					トウヨシノボリと呼ばれていたもの
32			ウキゴリ <i>Gymnogobius urotaenia</i>	●	●		●			
33			ビリンゴ <i>Gymnogobius breunigii</i>	●	●					
34			ジュズカケハゼ <i>Gymnogobius castaneus</i>	●	●	●	●			
35		タイワンドジョウ科	カムルチー (ライギョ) <i>Channa argus</i>		●					国外外来種
36	カレイ目	カレイ科	スマガレイ <i>Platichthys stellatus</i>	●						

サケ科の魚類

当別川の中上流域ではサケ科魚類であるサクラマス（ヤマメ）とアメマス（エゾイワナ）が生息している。サクラマスとはその降海型を指し、河川残留型（陸封型）をヤマメと呼ぶ。降海型は全長 70cm になるが、ヤマメは 30cm 程度までの大きさである。ヤマメの体側には小判形をした暗青色の斑紋（パーマーク）が並ぶのが特徴であるが、降海が近づくと体色が銀色となって斑紋は消失する。この状態をスモルト（銀化）と呼ぶが、河川残留型には成熟後もパーマークが残存する。

サクラマスの親魚は4月から6月に遡上し、9月から10月に産卵を行う。「桜鱒」の名称の由来は、産卵期を迎えると桃色（桜色）がかった婚姻色が体に現れることによる、桜の開花時期に遡上してくる魚であることによる、などの説がある。降海型は幼魚期の1、2年を河川で過ごした後、3月から5月に海に下る。回遊しつつ成長し、降海後1年で成熟、川に遡上して産卵。その後に死亡するが、河川残留型個体は死亡せず、翌年2回目の産卵を行ってから寿命を迎える。産卵床（卵を産む場所）は水通しの良い砂礫質^{されき}の河床に形成される。なお本種は河川への遡上後も、河畔林からの落下昆虫や流下する水生昆虫、底性生物などを捕食する。溪流



写真34 アメマス（写真提供/角田武氏）

釣りの対象魚として人気が高く、各地で放流事業がさかんに行われているため、地域個体群への遺伝子汚染が引き起こされている。

アメマス（エゾイワナ）（前頁写真34）は山形県以北の日本海側、千葉県以北の太平洋側に分布する。生涯を淡水で過ごす河川残留型がエゾイワナ、降海し産卵のために川を遡上してくるものがアメマス（雨鱒）と呼ばれる。孵化後すぐには降海せず、2年から3年程度を河川で過ごした後に降海する。産卵後、一部の個体は生き残り、翌年以降も繁殖活動を行う。

エゾイワナは水生昆虫および河畔林からの落下昆虫類を主な餌資源とし、時に河岸の陸生哺乳類や両生類、爬虫類なども捕食する。アメマスは主に他の魚類の幼魚や稚魚、甲殻類などを捕食する。

底生動物

底生動物については、これまでに記録されている20種について次頁表7に示した。底生動物とは水域の底質に生息する生物であるが、本稿では淡水貝類・環形動物類・甲殻類について扱った。いずれも当別町域における分布域は詳しく調査されていないため、記録のある種名の掲載にとどめた。

エゾミズゴマツボは汽水域から淡水期にかけて生息する淡水巻貝の北方種。コシダカヒメモノアラガイは水田畔や湿地の水際に見られ、モノアラガイは流れのほとんどない水路やため池などに生息する。ヒラマキミズマイマイは水田や排水路、休耕田の水たまりなどに生息する平べったい淡水貝類。イシガイは湖沼および緩やかな流れのある河川の下流域や用水路などの砂泥底に生育する二枚貝。エゾドブシジミは流れが穏やかでかつ小規模な用水路や河川の砂底、泥底あるいは水田に生息する淡水二枚貝である。

スジエビは淡水性の小型エビ類で、かつて当別川では大量に捕獲できたという。モクズガニは海域で繁殖し、稚ガニが川を遡上して淡水域で成長し、数年かけて成熟すると産卵のため降海する。本種もまた、かつては当別川下流域でたくさん捕獲できたとの記録がある。ザリガニはニホンザリガニとも呼ばれる在来種である。流量の少ない沢筋の礫底に生息するが、周囲に落葉樹が繁茂する環境であることが条件となる。貯水湖や池などの淡水に生息する微小な甲殻類であるカイアシ類のうち、浮

遊性の種がキクロプス属（ケンミジンコ）と呼ばれる。

表7 石狩川下流当別地区自然再生事業地に生息する底生貝類・甲殻類ほか

	門名	綱名	目名	科名	和名 学名	備考
1	軟体動物門	腹足綱	新生腹足目	ミズゴマツボ科	エゾミズゴマツボ（カラフトミズゴマツボ） <i>Stenothyra recondita</i>	
2				タニシ科	マルタニシ <i>Cipangopaludina chinensis laeta</i>	
3					オオタニシ <i>Heterogen japonica</i>	
4			汎有肺目	モノアラガイ科	コシダカヒメモノアラガイ <i>Lymnaea truncatula</i>	<i>Galba cf. truncatula</i>
5					モノアラガイ <i>Radix auricularia japonica</i>	
6				ヒラマキガイ科	ヒラマキミズマイマイ <i>Gyraulus spirillus</i>	
7		二枚貝綱	イシガイ目	イシガイ科	イシガイ <i>Nodularia douglasiae</i>	
8			マルスダレガイ目	ドブシジミ科	エゾドブシジミ <i>Musculium miyadai</i>	
9	環形動物門	ゴカイ綱	サシバゴカイ目	ゴカイ科	ヒメヤマトカワゴカイ <i>Hediste atoka</i>	
10		ミミズ綱	オヨギミミズ目	オヨギミミズ科	オヨギミミズ科の1種 <i>Lumbriculidae</i>	
11			イトミミズ目	ミズミミズ科	ミズミミズ科の1種 <i>Naididae</i>	
12		ヒル綱	吻蛭目	ヒラタビル科	ハバヒロビル <i>Alboglossiphonia lata</i>	
13					スマビル <i>Helobdella stagnalis</i>	
14			吻無蛭目	イシビル科	シマイシビル <i>Dina lineata</i>	<i>Erpobdella lineata</i>
15	節足動物門	軟甲綱	ヨコエビ目	キタヨコエビ科	オオエゾヨコエビ <i>Jesogammarus jesoensis</i>	
16			ワラジムシ目	ミズムシ科	ミズムシ <i>Asellus hilgendorfi hilgendorfi</i>	
17			エビ目	テナガエビ科	スジエビ <i>Palaemon paucidens</i>	
18				アメリカザリガニ科	ザリガニ（ニホンザリガニ） <i>Cambaroides japonicus</i>	
19				モクズガニ科	モクズガニ <i>Eriocheir japonica</i>	
20		六幼生綱	キクロプス目	キクロプス（ケンミジンコ）科	キクロプス属（ケンミジンコ属）の1種 <i>Cyclops.sp</i>	

第4節 昆虫



写真35 エゾアオイトトンボ (写真提供/広瀬良宏氏)

約2500種に及ぶ昆虫類

当別町で記録されている昆虫16目を表8に、自然再生地域で生息の確認されたトンボ類29種について次頁表9に示した。また、『石狩川水系 当別川 当別ダム建設事業 環境影響調査報告書』(1993年4月)には、沼ノ沢貯水池近くで、エゾアオイトトンボが採集されていたこ

表8 当別町で記録された主な昆虫類

	目名	学名	主な科名
1	カゲロウ目（蜉蝣目）	EPHEMEROPTERA	トビイロカゲロウ科／モンカゲロウ科／マダラカゲロウ科／コカゲロウ科／チラカゲロウ科／ヒラタカゲロウ科／フタオカゲロウ科
2	トンボ目（蜻蛉目）	ODONATA	アオイトトンボ科／カワトンボ科／モノサシトンボ科／イトトンボ科／ムカシトンボ科／ヤンマ科／サナエトンボ科／オニヤンマ科／エゾトンボ科／ヤマトトンボ科／トンボ科
3	カワゲラ目（楯翅目）	PLECOPTERA	トワダカワゲラ科／カワゲラ科／ミドリカワゲラ科
4	ハサミムシ目（革翅目）	DERMAPTERA	ハサミムシ科／クロハサミムシ科／オオハサミムシ科／クギヌキハサミムシ科
5	バッタ目（直翅目）	ORTHOPTERA	カマドウマ科／ケラ科／コオロギ科／カンタン科／キリギリス科／バッタ科／ヒシバッタ科／ノミバッタ科
6	カジリムシ目（咀嚼目）	PSOCODEA	チャタテ科
7	アザミウマ目（総翅目）	THYSANOPTERA	アザミウマ科
8	カメムシ目（半翅目）	HEMIPTERA	セミ科／アワフキムシ科／ツノゼミ科／ヨコバイ科／ウンカ科／タイコウチ科／コオイムシ科／ミズムシ科／マツモムシ科／アメンボ科／サシガメ科／ヘリカメムシ科／カメムシ科／など
9	ハチ目（膜翅目）	HYMENOPTERA	ハバチ科／ヒメバチ科／アリバチ科／クモバチ科／ツチバチ科／アリ科／スズメバチ科／アナバチ科／コハナバチ科／ハキリバチ科／ミツバチ科など
10	ヘビトンボ目（広翅目）	MEGALOPTERA	ヘビトンボ科／センブリ科
11	アミメカゲロウ目（脈翅目）	NEUROPTERA	ヒロバカゲロウ科／ヒメカゲロウ科／クサカゲロウ科／ウスバカゲロウ科
12	コウチュウ目（鞘翅目）	COLEOPTERA	ハンミョウ科／オサムシ科／ゲンゴロウ科／ミズスマシ科／ガムシ科／エンマムシ科／シデムシ科／ハネカクシ科／クワガタムシ科／センチコガネ科／コガネムシ科／タマムシ科／コメツキムシ科／ベニボタル科／ホタル科／テントウムシ科／カミキリムシ科／ハムシ科／オトシブミ科／ゾウムシ科／キクイムシ科など
13	シリアゲムシ目（長翅目）	MECOPTERA	シリアゲムシ科
14	ハエ目（双翅目）	DIPTERA	ガガンボ科／ケバエ科／カ科／ブユ科／スカカ科／ユスリカ科／アブ科／ツリアブ科／ムシヒキアブ科／ハナアブ科／ハモグリバエ科／キモグリバエ科／ショウジョウバエ科／イエバエ科／クロバエ科／ニクバエ科／ヤドリバエ科／など
15	チョウ目（鱗翅目）	LEPIDOPTERA	コウモリガ科／ハモグリガ科／キバガ科／イラガ科／マダラガ科／スカシバガ科／ハマキガ科／メイガ科／カレハガ科／カイコガ科／ヤマユガ科／スズメガ科／セセリチョウ科／アゲハチョウ科／シロチョウ科／シジミチョウ科／タテハチョウ科／ジャノメチョウ科／シャクガ科／シャチホコガ科／ドクガ科／ヒトリガ科／ヤガ科／など
16	トビケラ目（毛翅目）	TRICHOPTERA	ナガレトビケラ科／ヒゲナガカワトビケラ科／シマトビケラ科／トビケラ科／カクスイトビケラ科／カクツツトビケラ科／エグリトビケラ科／ニンギョウトビケラ科など

表9 石狩川下流当別地区自然再生事業地で記録されたトンボ目

	科名	種名	学名	産卵環境
1	アオイトトンボ科	アオイトトンボ	<i>Lestes sponsa</i>	挺水植物
2		オツネントンボ	<i>Sympecma paedisca</i>	挺水植物
3	モノサシトンボ科	モノサシトンボ	<i>Copera annulata</i>	浮葉植物
4	イトトンボ科	アジアイトトンボ	<i>Ischnura asiatica</i>	挺水植物
5		ルリイトトンボ	<i>Enallagma circulatorum</i>	浮葉植物
6		クロイトトンボ	<i>Paracercion calamorum calamorum</i>	浮葉植物
7		オオイトトンボ	<i>Paracercion sieboldii</i>	浮葉植物
8		セズジイトトンボ	<i>Paracercion hieroglyphicum</i>	浮葉植物
9		オゼイトトンボ	<i>Coenagrion terue</i>	挺水植物
10		エゾイトトンボ	<i>Coenagrion lanceolatum</i>	浮葉植物
11		キタイトンボ	<i>Coenagrion ecornutum</i>	浮葉植物
12	ヤンマ科	アオヤンマ	<i>Aeschnophlebia longistigma</i>	挺水植物
13		オオルリボシヤンマ	<i>Aeshna crenata</i>	挺水植物
14		マダラヤンマ	<i>Aeshna mixta soneharai</i>	挺水植物
15		ギンヤンマ	<i>Aeshna crenata</i>	浮葉植物
16	サナエトンボ	コサナエ	<i>Trigomphus melampus</i>	空中散布
17	エゾトンボ科	オオトラフトンボ	<i>Epithea bimaculata sibirica</i>	浮葉植物
18		カラカネトンボ	<i>Cordulia amurensis</i>	水面
19	トンボ科	ヨツボシトンボ	<i>Libellula quadrimaculata asahinai</i>	水面
20		シオカラトンボ	<i>Orthetrum albistylum speciosum</i>	水面
21		ナツアカネ	<i>Sympetrum darwinianum</i>	草地
22		アキアカネ	<i>Sympetrum frequens</i>	泥
23		マユタテアカネ	<i>Sympetrum eroticum eroticum</i>	泥
24		マイコアカネ	<i>Sympetrum kunckeli</i>	泥
25		エゾアカネ	<i>Sympetrum flaveolum flaveolum</i>	泥
26		ヒメリスアカネ	<i>Sympetrum risi yosico</i>	草地
27		ノシメトンボ	<i>Sympetrum infuscatum</i>	草地
28		キトンボ	<i>Sympetrum croceolum</i>	水面
29		ウスバキトンボ	<i>Pantala flavescens</i>	水面

とが報告されている。これは第2回自然環境保全調査(1983年環境庁)で、特定昆虫*4として取り上げられていたトンボである。

昆虫類については文献資料(『石狩郡当別町西当別風力発電事業計画段階環境配慮書』)に記載されているものだけでも約2500種に及ぶため、各目の代表的な科名のみを補足的に紹介するにとどめた。なお、同文献ではトンボ、カワゲラ、カメムシ、コウチュウ、ハチ、ハエ、トビケラ、チョウの8目35科80種を重要な種として掲載している。

*4 良好な自然環境の指標となる昆虫として、環境省により選定されたものを指標昆虫類とし、都道府県ごとに選定されたものを特定昆虫類(都道府県ごとに50~100種程度)としている

〈引用・参考文献〉

開拓80年記念誌編纂委員会『茂平沢80年の歩み』(1969年)
 中央部落史編纂委員会『中央部落史 百年の歩み』(1978年)
 高岡部落史編集委員会『当別高岡一世紀のあしあと』(1981年)

- 東裏開基百年記念事業協賛会『ふるさと百年』（1984年）
- 池田和彦「札幌大橋チョウゲンボウ調査」『石狩川環境調査抜粋資料』（1998-1999年）
- 『北海道石狩川下流域におけるチュウヒの繁殖状況』（山階鳥類研究所、1999年）
- 「ラジオテレメトリー法による猛禽類の行動圏調査」『EFP研修会抜粋資料』（2001年）
- 『北海道野鳥だより 第123・153・161・175号』（北海道野鳥愛護会、2001-2014年）
- 『アンブレラ種であるオオタカを指標とした生物多様性モニタリング手法の開発に関する研究』（森林総合研究所北海道支所、2003年）
- 『北海道の猛禽類－クマタカ、オオタカ、ハイタカ、ハチクマ』（北海道猛禽類研究会、2005年）
- 中島宏章・石井健太「北海道札幌市、石狩市、当別町におけるドーベントンコウモリ *Myotis daubentonii* の捕獲記録」（2005年）
- 『平成19年度環境影響評価技術手法（人と自然との触れ合い関連）調査 自然とのふれあい活動 ふれあいマップー当別川下流域地域』（環境省、2007年）
- 『「石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ」議事録』（北海道開発局石狩川開発建設部札幌河川事務所、2007-2018年）
- 『石狩川下流当別地区自然再生実施計画書 水と生きものの郷トゥ・ベツ』（北海道開発局石狩川開発建設部札幌河川事務所、2008年）
- 石井健太・柳川久・中島宏章「コウモリ類にとっての防風林の有用性について」（2008年）
- 「石狩のチョウザメ」（石狩市教育委員会いしかり砂丘の風資料館HP、2010年）
- 道川富美子「北海道の放牧地に一時的に形成された水溜まりに飛来したシギ・チドリ類」（2014年）
- 「石狩に伝わるチョウザメのお話し」（いしかり市民カレッジ主催講座HP、2015年）
- 出羽寛・斎藤久・小林功「北海道旭川市におけるニホンジネズミ *Crocidura dsinezumi* (*Soricomorpha*, *Soricidae*) の初記録」（2016年）
- 石川・福田・玉田・島村・小野・西川・内藤「北海道当別町高岡地区におけるため池の水環境と魚類相の特徴について」（2020年）
- 『石狩振興局管内野鳥年次記録（2012～2021）』（石狩鳥類研究会、2021年）
- 『石狩郡当別町西当別風力発電事業環境影響評価方法書』（当別町西当別陸上発電所、2021年）
- 「石狩川下流当別地区自然再生」（国土交通省北海道開発局札幌開発建設部）
- 『石狩川水系当別川当別ダム建設事業環境影響評価書』（北海道、1993年）

〈謝辞〉

本稿の作成にあたり当別町在住の野生鳥獣研究家である池田和彦氏・道川富美子氏より貴重なデータおよびご助言を賜りました。厚く御礼を申し上げます。

*写真説明におけるカッコ内の地名等は、町内の撮影地。また写真1、2、4、6、7、8、9、13、14、16、17、18、19、21、22、23、25、27、28、29、30、31、32、33は道川富美子氏撮影、写真3、5、10、12、15、20、24、26は池田和彦氏撮影。